哲学カフェ＠名古屋　レビュー

テーマ「別れとは何か？」

文責：奥田太郎

今回の対話は、一つの流れが生まれるというよりも、興味深い論点がその都度掘り起こされるという仕方で進んで行ったため、私自身の印象に残った論点を挙げてレビューとしたい。

①別れによい／悪いはあるか？→別れは主体的かつ能動的にかかわるポジティブな関係を前提とする。それがなくなって悲しい／よかったという思いがなければ、別れは意識されない。（←→どうでもいいもの、忘れてしまうようなものに別れは成り立たない。）

②年齢とともに別れは増える。→しかし、孤独死するような独居老人には、新たな別れがない。別れは、人との関係性の証しであり、また叙情的なものの極地とも言えるとすれば、それがなくなることは、その人の人生を乏しいものにする。

③物との別れ：まだ使える（何とかできる）のに手放すことを詫びながら感謝の気持ちを込めて、物と「別れる」ことがある。それは捨てる行為ではない。
本との別れ：以前に大きく影響を受けていた本を久々に読んで、もはやそこに何も感じなかった時に、その本との「別れ」が訪れる。→別れの前提としての「自分への影響」
→別れは、自分が何のどこに執着しているかに深く関わっている。
→執着を捨てる時＝別れの時

④別れは、自分の意志でコントロールできるものとは限らない。別れたくても別れられない、別れたくなくても別れてしまうようなこともある。そこに人生の機微がある。

⑤別れと時間
別れは、それまでの関係性の余韻や後味を味わうことでもある。
自分との別れ：生きて行くこと＝味わって行くこと…時間によって味は変わる。
別れと出会いは、変化が生じる目印という点で、同じである。
別れの人称性：三人称的な別れは、無時間的な出来事として捉えられるが、一人称的な別れは、一定の時間的な厚みをもつ（時間とともに意味付けがかわる）出来事として捉えられる。

⑥別れの効用とはどのようなものか？→別れのない出会いがあるとすれば？
別れがあるからこそ、我慢することができたり、関係を仕切り直すことができたりする。

⑦意見Ａ：いわゆる「別れ」を経験したことがない。世間的にそう言われる出来事は、自分にとっては、離れること、なしにすることであり、「別れ」ではない。⟷意見 Ｂ：別れは、新しいステージへの入り口であり、別れを通じて人生の厚みが増していくものなので、別れを経験したことがないというのは考えられない。
→「別れ」とは、使われたり使われなかったりする人生のツールではないか？